

令和5年度文京区内大学学長懇談会
議事録

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

令和5年度文京区内大学学長懇談会
会議次第

日時：令和5年12月5日（火） 10:28～12:00

場所：東京ドームホテル5階小宴会場「真砂」

- 1 開会挨拶（文京区長）
- 2 報告事項
大学学長講演会実績及び区内大学と区との連携実績
- 3 懇談・意見交換
テーマ『アフターコロナにおける大学の取組みについて』
- 4 その他
区からの情報提供

○アカデミー推進部長 皆様、おはようございます。

定刻前ではございますが、ただいまから、令和5年度「文京区内大学学長懇談会」を始めさせていただきます。

本日は、お忙しいところ、皆様に御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日の司会進行を務めさせていただきます、アカデミー推進部長の高橋と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日の懇談会は、お手元の次第に沿って進めさせていただきます。

資料ですが、次第以下、資料1～5は、事前にデータを送付させていただきました。資料4の出席者名簿に変更があり、本日配付のものが最新となっております。懇談・意見交換資料のファイルには、大学様からの配付資料が入っております。

まず、区から御報告させていただきます、次に、意見交換となります。本日のテーマは、『アフターコロナにおける大学の取組みについて』でございます。忌憚のない御意見をいただければと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

初めに、成澤区長より、御挨拶申し上げます。

○区長 皆さん、おはようございます。区長の成澤でございます。

毎年行っております文京区内大学学長懇談会ですけれども、これまではシビックセンター最上階のスカイホールで開催しておりましたが、私どもは、コロナもあり、新たな事務も増えているということで、事務スペースが足りなくなっております。令和7年度に児童相談所を文京区でも開設するというので、今、あの部屋は児童相談所の開設準備担当が使っておりまして、会議室もございません。その下にあった椿山荘さんが入っているレストランは、コロナで椿山荘さんが撤退されて、その後はワクチン接種会場になって、お弁当の御用意もできないということで、しばらくはこちらの会場で開催することになると思っています。

日頃から、区政各般にわたりまして、区内大学の皆様方には、大変お世話になっておりますことに、心から感謝を申し上げたいと存じます。

今日は、『アフターコロナにおける大学の取組みについて』がテーマですが、ようやく地域での活動も戻ってまいりまして、町会や自治会での活動を再開していただいて、区民が誇りを持ってこの地に住んでいただくために、様々な支援を区としても行っているところです。大変ありがたいのは、区内大学の学生さんたち、特にボランティアの皆さんたちに、いろいろな地域のお祭りや行事に御協力いただけるようになっております。これは大学の後押しもあってのことだと思っておりますが、この秋にも、文京区内の神社祭礼はほとんどが秋なのですが、多くの大学生たちが町会のおみこしを担いでくれて、びっくりしたのは、お茶大の徽音祭の実行委員会の女子学生もはっぴを着ておみこしを担いでくれているのを見て、裾野が本当に広がっているなということを実感しているところでございます。この学長懇談会は、コロナの間は、オンラインでやったり、ハイブリッドでやったりしてございましたけれども、ちょうどオンラインで開催した令和3年度に地球温暖化対策についての

問題提起をさせていただいて、区内の大学の皆様たちの御協力をいただき、先日の地球温暖化対策でそれぞれの大学のお取組みを紹介し合う意見交換会も今年で2年目になりましたけれども、そのような取組みにも発展しているところで、感謝をしているところでございます。『アフターコロナにおける大学の取組みについて』、本日は御意見をいただき、私どもも参考にさせていただきたいと思っております。

後ほど事務局から御説明させていただきますが、大学との連携によるふるさと納税の取組みも始めさせていただきたいと思っております。私どもは、なるべく返礼品に頼るのはやめようということで、ずっと、貧困家庭の支援といった、返礼品のない、政策目的のふるさと納税に取り組んでまいりましたが、本年、35億円のふるさと納税による減収を見込んでいるということで、いよいよきれいごとばかりは言っていられない状況にもなっております。東京大学さんにも御協力いただき、体験型の返礼品とか、いろいろな取組みを始めているところですが、今日、後ほど御説明させていただくのは、ふるさと納税を活用して大学への寄附を誘導するという仕組みをぜひやりたいと思っております。本日の資料は地域連携事業の促進ということになっていきますけれども、例えば、体育館のようなものを建て替えるときに、区民利用ができるという仕組みを入れていただければ、立派な地域貢献ですので、ほとんどは学生さんが使う体育館であったとしても、例えば、卒業生等から寄附を呼び込むことが可能になります。例えば、図書館の一般利用を区民に限って許可いただくとか、いろいろなやり方があるかと思っております。これまで、企業や法人等からの大学への寄附にはそれぞれの大学がお取組みをされていると思いますが、卒業生の方たちからの一般の寄附制度で寄附を招くよりは、ふるさと納税を活用したほうが、卒業生の皆さんたちの出しやすさは格段に出しやすくなるはずでございますので、そういったことについても、それぞれの大学とお取組みを進めることができればと思っております。

今日は、皆様方からの御意見、貴重なお時間を頂戴いたしますことに、改めて感謝を申し上げて、冒頭の挨拶とさせていただきます。よろしく願いいたします。

○アカデミー推進部長　ここで、本日出席しております区の職員を御紹介させていただきます。

まず、佐藤副区長でございます。

加藤教育長でございます。

大川企画政策部長でございます。

横山企画課長でございます。

矢島アカデミー推進課長でございます。

どうぞよろしく願いいたします。

それでは、次第に沿って進めさせていただきますが、その前に、皆様にお願いがございます。本日の懇談会につきましては、区ホームページへの掲載等がございますので、写真撮影、また、会議録作成のための録音をさせていただきたいと存じますので、御了承のほどよろしく願いいたします。なお、会議録につきましては、案の段階でお目通しいただ

くことを予定しております。重ねてお願い申し上げます。

それでは、次第のうち、報告事項について、アカデミー推進課長より、区と大学との連携実績等について、御報告させていただきます。

○アカデミー推進課長 それでは、資料1を御覧ください。大学学長講演会の開催実績でございます。

今年度につきましては、12月16日、中央大学の河合学長に記載の講演をお願いする予定でございます。

続きまして、資料2を御覧ください。連携実績の一覧でございます。

新規のところを御案内させていただければと思います。4ページを御覧ください。文京区ゆかりの文化人でございます森鷗外関連での新規事業を、10番から26番にかけて、掲載しております。

続きまして、9ページを御覧ください。41番でございます。欠員が課題となつてございましたスポーツ推進委員につきましては、今年度より、7名の学生の皆さんに御協力いただいているところでございます。

続きまして、14ページを御覧ください。4番、大塚地活の活用でございますけれども、こちらを含めて、中央大学茗荷谷キャンパスの関係では、17ページの2番、キッズルーム、18ページの7番、茗荷谷育成室、あるいは、20ページの駐輪場などがございます。

説明は、以上でございます。

○アカデミー推進部長 説明は、以上でございます。

引き続き、次第の3、意見交換に入らせていただきます。本日のテーマは、繰り返しのようになりますが、『アフターコロナにおける大学の取組みについて』でございます。テーマあるいは令和5年度の連携実績などについて、大学ごとに御意見を賜りたいと存じます。大変恐縮でございますが、時間の都合もございまして、お1人様3分程度でお願いできればと存じます。よろしく願いいたします。

それでは、中央大学の橋本副学長から、お願いいたします。

○中央大学 中央大学の橋本でございます。

中央大学は、本年から、茗荷谷に法学部が移転してまいりまして、後楽園にあります理工学部ともども、文京区様にお世話になることになりましたので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

私は、副学長といたしましては、学務、大学改革、大学評価、スポーツを担当しております。法学部では、憲法を担当しております。

先ほど、文京区さんとの関わりということでございましたけれども、これまでも茗荷谷キャンパスが一部文京区様の施設ということで、共用という形で一定の貢献をさせていただいておりますけれども、そのみならず、これからは法学部が文京区に参りましたので、様々な法学のコンテンツも提供できるのではないかと考えております。こんな形で住民の皆さんに貢献できれば、私どもとしても大変幸いということでございます。

アフターコロナということでございますけれども、コロナが終わったわけではもちろんないわけでありますので、コロナを経験しての一つの知見という形で、今回はお茶を濁させていただきたいと思っております。

中央大学は、コロナ禍でほとんどの授業をウェブで実施しておりました。ウェブで実施いたしますと、そのウェブのよさと悪さあるいは対面にする必要があるものとならないものは、ある程度、判別されてまいりました。恐らく多量に、同じ知識、標準的な知識を伝達するものについては、ウェブで十分だろうと。ただ、問題を立てたり、議論をしたり、より親密な知の交換ということであると、やはり対面に勝るものはないということだったように思います。

コロナを経験して、また元に戻るかということそうではなくて、法学部は特にそうでございますけれども、一定の授業をウェブのまま残しております。

例えば、私どもは多摩にまだ相当数の学生がおります。多摩にスポーツ施設がございますので、体育関係の学生はまだ多摩で活動していると。週1回か2回は茗荷谷に通ってくるわけでありましてけれども、全ての授業を茗荷谷でとはなりません。そういうことで、このオンラインの授業、オンデマンドの授業を活用して、一定の単位、設置基準では60単位という上限がございますけれども、かなりの部分をここで補うことができるのではないかと。ということで、茗荷谷の授業を多摩でも聞けるという工夫をしているところでございます。

新しい学びの在り方というのでしょうか、学びの多元化と言っているかと思っておりますけれども、実はこれは茗荷谷の学生についても同じであります。一つのコンテンツを繰り返し見られる。ただ、学生によっては、2倍速、3倍速で見ている。内容は変わらないわけでありまして構わないわけでありましてけれども、学生の学びの多様化にもそれが一定の貢献をしているのかなというところも、最近、感じているところでございます。

会議は、今でも、原則、オンラインでやっております。よほど対面で実施しなければいけない機密性が高いものは別にして、キャンパスが幾つかありますので、これをオンラインで結んでやっている。これが、現状でございます。

茗荷谷でございますけれども、1階に学生センターというものがございまして、これは多摩のキャリアセンターがオンラインで相談に応じてくれるものですから、距離的な隔たりはございますけれども、情報の隔たりにはならないようにという形で、各キャンパスを結んで、同じようなイメージを共有できるような工夫をしているところでございます。

簡単でございますけれども、中央大学の取組みについて、御報告いたしました。

ありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、国際仏教学大学院大学学長、デレアヌ フロリン様、お願いいたします。

○国際仏教学大学院大学 大変恐縮でございます。国際仏教学大学院大学のデレアヌ フロリンと申します。本日は、お招きいただきまして、本当にありがとうございます。

それでは、国際仏教学大学院大学の『アフターコロナにおける大学の取組みについて』、簡単に御紹介させていただきます。

御存じだと思いますけれども、国際仏教学大学院大学は、文京区ではそうだと思いますけれども、日本全国が一番小さな規模の大学院大学で、仏教学研究科1つのみを持っています。学生20名という定員と、数名の研究生、先生方、合わせて全部で30名ということで、そういった意味では、いろいろなコロナ時の対策は講じやすいかと思いますが、それでもいろいろと工夫して、特にオンライン授業の幅を大きく拡大して、ほとんどの授業を一時的にオンラインで行った次第でございます。しかし、コロナの終息に向かっていく状況の中で、一部の授業科目を除いて、ほぼ全ての授業科目は対面授業を再開しております。特に全教員・学生が参加する仏教学特殊研究という大きな授業があって、30名以上が集まるところでございますが、それに関しましては、今まで使っていた講義室ではなく、大学の一番大きな講堂を使って、なるべく密集にならないように、工夫しております。また、新型コロナウイルスやインフルエンザの流行に備えて、適宜、オンラインの授業を行っています。特に先生あるいは学生の大多数があまり体調のよくないときに、オンラインで行えるという仕組みを取っております。

また、アフターコロナの取組みの一つは、海外の学生、研究者の受入れを再開しております。一部取りやめになっていた、一般向け、区民を特に対象としている公開講座、公開研究会、また、仏典講読講座という公開型の講座も、一時的に休止しておりましたが、再開しているところでございます。研究者向けの主催の講演会も、これは特に海外からお招きしている客員研究員や客員教授などですが、再開しております。図書館も、コロナ時、主に、学部の学生、先生方の利用に限っておりましたけれども、この収束という状況を受けて、今は一般の外部の利用者受入れを再開しているところでございます。

簡単ではございますが、以上です。どうもありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、日本社会事業大学学長、横山様、お願いいたします。

○日本社会事業大学 学長の横山でございます。

それでは、着座で失礼いたします。

お手元の懇談・意見交換資料に1枚紙とパンフレットをつづったものを用意していますので、お手元に置いていただいて、お耳を拝借したいと思います。

本学は、文京区にサテライトの形の小さなキャンパスを持っております関係で、こうした機会をお与えいただきました。この機会に感謝を申し上げます。文京キャンパスでは、大学院の専門職大学院、1学年50名の展開をしています。本日は、主に『アフターコロナにおける大学の取組みについて』ということで、メインキャンパスである清瀬についてお話をさせていただきます。

本学では、コロナの対策本部を引き続き継続して、今も月に1回、いろいろな形での検討を継続しております。学部授業は基本的には対面で実施することにしましたが、大学院

ではハイブリッド形式の授業を継続しております。キャンパスライフとしては、コロナ禍で非常に学生諸君も苦勞したわけで大学生協が撤退することになりましたが、大学生協から新規事業者に切り替わりまして学内の食堂と売店を再開して、キャンパスライフの質を向上させているところでございます。

文京区の事務局からのお問合せで、国際交流などはどのような展開をしているのかということでもございました。コロナ禍の状況の下ではなかなか難しいものでございますが、一段落したということで、資料に記載したような取組みをしてございます。今年度には、来年の3月、オンライン形式で協定校のオーストラリアのニューサウスウェールズ大学との共同ワークショップを開催し、韓国へのスタディーツアーを、学生諸君が参加する形で、10名、大学院生も1名含まれていますが、国際交流を粛々と進めているということでもございます。

成澤区長からもお話がございました連携ということに関して、文京区では私どもは全く寄与できておりませんが、清瀬市内に3大学がございまして、その3大学が市と連携協定を結んでおります。さらに、3大学だけの包括連携協定を結んでおります。市が中心に行っている連携事業としては、昨年10月に、「がんと向き合い方」というテーマで、3大学がそれぞれの専門分野で講演をし、市民への様々な情報提供もさせていただきました。私が学長に就任したときはコロナ禍の状況下でもございましたので、3大学の学長間でいろいろな意見交換をしたのですが、なかなか難しく実現できなかったのですが、私の発案で、3大学のサマースクールを来年の夏に実施できないかということで、今、検討しているところでございます。

最後に、今回、文京区のホームページで私なりに調べさせていただいたところ、区の19大学のうち16大学が相互協力協定というものが結ばれています。本学はまだ結ばせていただいていないのですが、本学は、社会福祉の専門大学として、区民の皆様の福祉向上に向けて、区と連携して貢献できる機会があれば、また、連携協定の可能性があれば、前向きに検討させていただきたいと思っております。そのことをお伝えしたいと思います。

以上でございます。ありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、東洋大学副学長、東海林様、お願いいたします。

○東洋大学 学長の矢口の代理で参りました、東海林と申します。よろしく申し上げます。教育担当、高大連携、大学院担当の副学長をやっております。

着座させていただきます。

アフターコロナにおける本学の取組みということで、お手元にカラー刷りでパワーポイントの資料を用意させていただきました。御多分に漏れずといえますか、学長の矢口も私も、コロナが発生したときにちょうど着任したものですから、まさに訳も分からずに最初は突っ走っていたということがございました。確かにコロナ対応も非常に大変だったのですけれども、逆に、その渦中であって、これがそんなに長く続くわけでもない、5年や

10年も続くわけがないと。それが終わったときを見越して、何を、今、腰だめをしておこうか、準備をしておこうかと、学長といろいろと話をし、いろいろなことをやってきたところになっております。いろいろな、教員の方々、考えの方々、職員の方々がいらっしゃいますので。大学が一本になるといいますか、同じベクトルを持つというのは、逆にこのような機会でもないときっかけがつかめないのではないかと考えたところになっております。

1 ページ目の下のスライドにありますように、大きくは3つ、ウェブの活用も含むのですが、教育DXの推進、国際化とSDGsの展開、リカレント教育と社会貢献活動になっております。

2 ページ以降にその概要を示してございますけれども、目で追っていただくと分かると思うのですが、まず、2 ページ目、教育DXの推進。総合大学といえますか、マンモス大学でございますので、少人数授業を進めるとともに、3万人、一人一人の学生に寄り添った教育ができるようなラーニングマネジメントシステムをつくり上げたといったところ。

3 ページ目になりますけれども、スーパーグローバル大学に認定されておるのですが、それを発展的に進めていって、SDGsを本格的に展開しようといったところで、交換留学生の受入れあるいは送り出しを積極的にやっているところでございます。

4 ページ目になりますけれども、何事においても、教育を推進するのでも、研究を推進するのでも、先生方が研究をしっかりとやることが大事になりますので、こういった重点研究推進プログラムをやるとともに、学生の皆さんが4年間のキャンパスライフをいろいろな形で実りあるものにできるように、SDGsを展開してございます。おかげさまで、コロナの最中に、ゼレンスキー大統領も本学を指名して下さってビデオ講演会をやってくださったというところもございます。

5 ページ目になります。文京区さんにもいろいろお世話になっておりますけれども、リカレント教育あるいは社会貢献が大学としての社会的な務めでもございますので、それについても力を入れています。お話がありましたように、ウェブ授業、オンライン授業は、このリカレント教育や社会貢献活動にも大いに活用できる場所になりますので、文京区さんと連携・協力しながら、今後ともしっかりと進めていくと同時に、スポーツの力も侮れないところがありますので、スポーツセンターを造りまして、いろいろとやり始めているところでございます。残念ながら、文京区の白山には場所のスペースがございませんので、スポーツセンターというか、体育館は北区さんに造らせていただきましたけれども、十分に区を超えて活用できるようになっておりますので、ぜひともお声をかけていただきたいと思います。

以上になります。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、貞静学園短期大学学長、奥様、お願いいたします。

○貞静学園短期大学 貞静学園の奥でございます。いつもお世話になりまして、ありがと

うございます。

私どもの短大は、小規模短期大学で、また、文京区で1つある短期大学でございますので、大それたことはできないのですけれども、このコロナ禍、アフターコロナでどういったことをやってきたのか、説明させていただきます。

本学では、コロナ感染が拡大したとき、それまで当たり前に行っていた対面授業や事務連絡や就職相談なども、全て業務をオンラインに変えざるを得なくなったのですが、パソコンのレベルをグレードアップする寸前にコロナ感染拡大になり、部品がそろわず、機材不備の中で、教職員が、2～3か月、学生の授業対応等で、週に1度、教科の課題等を全学生にレターパックで発送するなど、相当混乱状態になりました。やっとパソコンのグレードを上げることができ、それからは授業もオンラインで、Teamsやチャットを使用して事務連絡、課題提出とコロナ禍を過ごしてきました。

今年の5月にコロナ感染の位置づけが5類に移行したことで、本学でもコロナ前の日常生活に戻りつつあります。今年度は、全面的に対面授業を復活し、学外の実習や中断していたオーストラリア夏季短期留学を3年ぶりに実施する等、教育研究活動にも積極的に取り組んでいます。また、本学は、ボランティア活動を学生の社会勉強の一つと位置づけて大学挙げて推進していますので、東京都障害者スポーツ大会や地元の茗荷谷ハロウィン、また、茗荷谷駅の防犯キャンペーンや子ども食堂への参加など、多くのボランティア活動を再開し、学生たちが積極的に参加しています。学生への連絡に関しても、Office 365の導入によって連絡手段が増え、課題やアンケートなどもFormsで実施することが増えて、ペーパーレス化につながっています。学生からの遅刻や欠席の連絡もアプリにしたことで、職員の電話対応業務が軽減されています。さらに、現在も引き続き、毎朝、自己体調管理を実施して、入構時に体温計測を義務づけ、学内要所に手指消毒用のアルコールを設置し、手指の消毒も義務づけています。

コロナ禍で打撃を受けたのは、学生募集の広報関係でございます。少子高齢化で少子化がどんどん進み、本学のような小規模短期大学にとって、コロナ禍での学生確保のためのオープンキャンパスが対面でできなくなり、さらに、教職員の高等学校訪問も軒並み中止となって、受験生や高校の先生方との接触がオンラインとなり、募集が厳しい状況になりました。受験生が、実際に大学へ来て、大学の空気に触れて、その大学のよさが分かることがオープンキャンパスの利点です。それが減少したのは痛手でしたが、コロナ禍で、ウェブで新しいチャンネルを工夫でき、その可能性を広げることができたことはよかったと思っております。ウェブ広報の活用、効果検証の方法は、アフターコロナでも継承されています。

結論として、ここ3年ほどのコロナ禍で、教学面、特に教員が授業を対面だけではなくウェブを使用して学生に分かりやすく工夫を凝らした内容を発信できたこと、また、事務業務面では、ペーパーレス化など、幾つかの業務を簡略化できたことが利点として挙げられます。ただ、アフターコロナの社会はビフォーコロナの環境に戻ることはありません

ので、コロナ禍で急速に進んだデジタル化の流れを後戻りさせずに、効果的に大学の活動に取り組んでいくことが必要と考え、活動によってはコロナ禍の取組みを継続して推進・発展させていくことがアフターコロナにおいて必要と考えています。

最後に、一言、お話しさせていただきたいのですが、アフターコロナからは少し外れるかもしれませんが、ここ何年も痛感していることです。大学教育全体を通して感じるのは、以前の大学生でしたら、大学教育はこうあるべきだ、自分で研究したいことを見つける、大学生活は自分で積極的につくっていくものだと考えていたと思います。それが当たり前と考え、学生たちが授業や学生生活をそれなりに楽しく充実して送っていたと思います。時代の変遷とともに、学生の気質や能力がどんどん変わり、大学全入時代において、大学教育というよりは、およそ大学生とは思えない幼稚な考え方をする学生が勉強方法が分からず、教員が手取り足取り教えなければならない現状、ささいなことですぐ精神的にまいってしまい、保護者が出てくる始末、また、教員も、パワハラ、セクハラ、アカハラを気にして、言うことも控える等、そもそも大学教育はと考えるを得ない状況になっていると思います。もちろんしっかりと目標を持って勉強している学生も多いですから、学生の気質の変化、能力の問題等も調整しつつ、さらに、来年4月から障害者差別解消法が施行され、その準備も必要ですから、アフターコロナにおいて、はこ物の充実とともに、学生への大学教育について考えてみる必要もあるのではないかと痛感しています。もちろん大学によって目標とする方向があるかと思いますが、これは私一個人の意見として捉えていただきたいとお願いいたします。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、東邦音楽大学学長、三室戸様、お願いいたします。

○東邦音楽大学 東邦音楽大学の三室戸と申します。

私どものキャンパスは、文京、川越、ウィーンにキャンパスもございます。このコロナについては、特にウィーンのキャンパスの研修ができなくなったことが一番の問題でした。音楽をやるためには、学生が、弾いたり、奏でたり、いろいろな形でやっていくわけですが、そのレッスン風景をビデオで撮りまして、それをユーチューブに載せて、ウィーンのほうへ送って、ウィーンで向こうの担当の実技の先生がそれを見て、「それに加えて、このようにするんだ」という形で、またビデオで日本に持ってきてまして、そのビデオを担当の先生と一緒に学生が見るということを一時期やりました。去年の9月から、ウィーン研修を実施しております。向こうも、もうそうやってきております。

座らせていただきます。

アフターコロナの問題でいいますと、音楽の場合にはどうしても対面でないとできないということがございます。コロナのときには、パーテーションを上から吊り下げたものだと、大分いろいろなことをやってまいりましたけれども、管理部門についての遠隔でのオンラインはやっておりました。最初のときには、5月の連休明けのところで、学生はスマ

ホを持っているものですから、連絡網に使いまして、それで連絡を取ったり、オンラインで流したりということ、2週間ほど、しておりました。キャンパスが文京と川越ということがありますので、それぞれの東京都と埼玉県のいろいろなコロナ対策に従っての対応をするということがございました。いろいろな文科省からの通知やクラシック音楽公演運営推進協議会等を考慮しつつ、そこを見ながら実施していております。それで、先月、23日は、こちらの文京シビックホールの大ホールをお借りいたしまして、第227回目になる定期研究発表演奏会、ウインドオーケストラの部を実施させていただきました。そこでは、オーケストラの演奏で、まだほかの音楽大学でやったことのないような曲も試しにやってみるという試みをいたしました。会場につきましては、せきのエチケットとか、いろいろなこともありまして、お断りすることもありましたけれども、皆さん、たくさん入って、演奏をじかに聞く、学生もお客さんに演奏ができるということが戻ってまいりまして、このところ、大分ございます。9日には、川越にありますウエスタ川越において、大友教授指揮によるオーケストラのコンサートを予定しております。また、17日には、東京芸術劇場で8音楽大学がオーケストラの祭典ということをやっております、それぞれの学校で2校が一緒になりましてその日に演奏会を開くということで、国立音楽大学と東邦が東京芸術文化劇場でオーケストラの演奏をするという形になっております。

このようなことで、学生についてもストレスがなくなってきましたし、先生も対面でやっている、今、安心して、活動、こういう形での発表の場が増えてきているということで、こちらは大変ありがたいと思っております。文京シビックさんとは、地下のホールで、学生や中高生が出る場合もありますけれども、そのようなことをこちらで行わせていただきまして、大変感謝しております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、放送大学東京文京学習センター所長、熊野様、お願いいたします。

○放送大学 熊野でございます。

私ども放送大学では、多様な学生を抱えておりまして、時に文京区様に御面倒をおかけしております。改めて御礼申し上げます。

着席させていただきます。

私どもは、「放送大学」という名のとおり、皆様とは少し設置形態等が異なりますので、事情も分かれていますけれども、そもそも、学習センターは全国50か所に設置しており、そこで、一般的な大学では「スクーリング」と呼ばれ、また、通信制では「対面授業」と呼ばれるものを、「面接授業」と称して開設しております。この面接授業を、文京センターに限りまして、年間260コマほどを開設しておりまして、コロナ禍において直接的な打撃を受けましたものがこの面接授業でございます。ただ、その面接授業をコロナ禍で対応するために幾つかの工夫をまいりましたが、その工夫のうち、コロナ禍が終了したわけではございませんけれども、徐々に日常に戻りつつある現在でも引き継いで新たな授業

形態として展開しつつありますものが、ライブウェブ授業でございます。Zoomを用いました双方向的な授業でございます、こちらは、最初は、あくまでも、面接授業、スクーリングの代替手段として展開しておりましたけれども、試行を重ねておりますうちに、例えば、文京で開設します面接授業を沖縄に所属する学生もZoom上で参加できる、地域の壁を越えた授業展開ができるようになったこと、また、幾つかのZoom授業を録画・録音いたしますことで、オンデマンドに対応する形態をつくることもできましたこと、必ずしもマイナス面ばかりではなく、新たな放送大学の展開に向けて、現在、模索中でございます。

とりわけ私どもが文京で心配しておりましたのは、文京に限らないのですけれども、心理学コースが大変学生の需要が多いのですが、心理学コースを修了するためには、心理学実験というものを履修しなければなりません。この心理学実験が、結果的に大変な人気授業になり、繰り返し抽選に落選するという、20回ほど落選した学生もおりまして、その停滞問題が懸案事項になっておりました。ところが、オンラインで心理学実験を試行しましたところ、停滞していた学生の90%程度が履修することができまして、思わぬけがの功名でございました。

その他、私どもとしましては、このコロナ禍で試行いたしました幾つかの試みを、なるべく前向きに捉えて、これからの放送大学の教学に生かしていきたいと考えているところでございます。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、筑波大学学長、永田様、お願いいたします。

○筑波大学 筑波大学の永田です。

本部はつくば市にあります、茗荷谷に東京教育大学から受け継いだキャンパスが残っています。その中には大きな1つの研究科である人間総合科学研究科の一部とビジネス科学研究科の2つ、社会人相手の大学院があります。それは35年前に開学してまして、その当時からずっと社会人だけの大学院です。

着座で話させていただきます。

文京区とは、パラのアスリートの育成とインクルーシブシステムの構築に関してお世話になっております。パラのほうで、1つだけ、信じがたい話を申し上げますと、パラスポーツの教育研究センターを造ろうと思って、ネーミングをそうしたところ、いきなり、JPC、日本パラリンピック委員会から、駄目出しがありました。日本では「パラ」が使えないとのこと。IPC、国際パラリンピックのほうに聞いたら、「いいのではないの」という返事なのですが、今、使えるよう交渉をしています。

授業や教育に関してはほぼコロナ前に戻っていますが、若干気になる幾つかの学生の行動があります。一つはインバウンドに関しては、二千数百名、ピーク時の9割ぐらいまで戻ってきているのですが、アウトバウンドは、ピーク時の半分までまだいかないという問題です。似たような現象として大変心配しているのが、この間、学園祭があったのです。

4年生も3年生も一度もやったことがない学園祭であり、2年生や1年生は高校時代に何もやっていない。結局、すごくおとなしい学園祭でした。心配です。つまり、学生たちは、多分、そういうコロナ禍環境の中で、これまでとは違う人間関係やメンタリティーで生きてきたのだらうと思うのです。これが一番心配です。この4月からヒューマンエンパワーメント推進局というものをつくりました。これは、ディスアビリティだけではなくて、一般の学生さん全てのエンパワーメント、つまり、才能を最大限発揮できるようなことを推進するものです。心身のエンパワーメントとともに、就職などにも力を入れてということで、障害者も健常者も一緒に面倒を見ているところです。先ほど奥先生もおっしゃいましたが、若い人たちがさらにコロナでへこんでいないかと心配です。徹底的に面倒を見ないといけないかなと思っております。

以上です。どうもありがとうございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、お茶の水女子大学学長、佐々木様、お願いいたします。

○お茶の水女子大学 お茶の水女子大学長の佐々木でございます。

文京区様とは文京区立こども園を共に運営させていただいております、大変お世話になっております。

本日は、『アフターコロナにおける大学の取組みについて』ということで、国際交流に関する取組みについてお話しさせていただきたいと思っております。

座ってお話しさせていただきます。

資料を置かせていただいております。

本日は、国際交流に関連して本学が取り組んでまいりました2つのプログラムを御紹介させていただきたいと思っております。一つは、平成30年度に採択されて令和4年度に終了したCOILでございます。これは本学及び共同申請いたしました大学の学生たちが米国の大学が提供する授業にオンラインで参加できることが特徴なのですが、本当に幸運だったと申しますか、ちょうどコロナが大変なときだったので、対面に代わる国際交流プログラムとして、大変有意義な取組みとなりました。もう一つは、令和4年度、昨年度に採択された大学の世界展開力強化授業ですが、グローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型EDIプログラムでございます。

次のページを御覧ください。まず、COILですが、米国の連携校との学生交流を幾つかそこに例示させていただきました。

最初の国際学生フォーラムは、下のスライドですが、こちらは、本学の教員が、アメリカのヴァッサー大学を相手校として、現在、ヴァッサー大学は女子大ではなくて共学になっておりますけれども、グローバル化と言語教育という授業科目で実施しているものでございます。テーマにあるとおりに、毎年、日米共通の話題をテーマに、コロナ前は実渡航、ウィズコロナになってからはオンラインで実施いたしております。

次のページの上の段を御覧いただければと思っております。こちらは、令和4年度に採択され

た、現在本学で実施中のグローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型EDIプログラムでございます。この授業のミッションは、ジェンダー視点から、公平性（Equity）、多様性（Diversity）、包括性（Inclusion）を目指すグローバルリーダーの育成です。また、主な目的として、実学型というEDIプログラムということがこのプログラムの大きな特徴の一つになっております。民間企業等と連携して、課外活動を通して学生の実践力を育成することなどを掲げているプログラムでございます。

その下のスライドを御覧いただければと思いますけれども、このEDIプログラムの実施には、これまでの本学における国際交流の実績が大いに関係しています。本学では様々な国際交流に関する取組みを行ってまいりましたけれども、このプログラムの特徴は、グローバル、インターンシップを含む全ての科目を英語で提供していることが挙げられます。現時点では、左下にあります、英国、オーストラリア、米国、カナダの4つの協定校と連携して、EDIプログラムを実施しております。

最後のページは、このプログラムの概要でございます。これは1年間のプログラムなのですが、オンラインと実質とを組み合わせられたプログラムとなっております。真ん中の8月から10月のところに、小さい字なのですが、「ジェンダー平等実践のためのインターンシップ」というものがありますが、これらのインターンシップも英語で開講しています。海外からの留学生から日本でのインターンシップを経験したいというリクエストはすごく多くございます。これまで本学ではそれに答え切れなかったのですが、このプログラムでは、本学の学生と留学生がペアを組んで、短期の場合には、2週間、様々なグローバル企業で実習を行います。国際機関と書いてありますものはまだ1つなのですが、ニュージーランド大使館の御協力を得ております。長期の場合には、本学の附属小学校で実践的なインターンシップを経験するというプログラムとなっております。できましたら文京区様にもこのプログラムに御協力いただければと思っております。ちょうど先日、9月にプログラムが終わりまして、初めてのグローバルインターンシップ報告会を開催いたしました。学生にとっても、さらに、連携企業様にとりましても、ペアで行った学生が英語でインターンシップを行うということで、大変貴重な実践の機会になったという御報告をいただいております。オンラインと対面の両方の形式を取り入れ、英語で実施しているEDIプログラムでございますけれども、参加学生にとって、机上の学習だけではなくて、企業などにおけるインターンシップを通して実践的な学びの機会が提供できているのではないかと考えております。

以上、お茶の水女子大学のウィズ及びアフターコロナにおける国際交流の取組みについて、COILとEDIを中心に御説明させていただきました。

昨年度の留学生数はまだコロナ前のレベルには達していませんでしたが、このCOILやEDIを通して、国際交流の機会を提供し続けてきたということが功を奏したのではないかと考えておりますけれども、本年度は、受入れの留学生、本校から派遣する学生数につきましても、コロナ以前またはそれを超えるような数値に戻ってきている状況でござ

います。

今後も、文京区にあります唯一の国立女子大学として、女子大生の国際化やリーダー育成に向けて機会を提供していきたいと思っておりますので、何とぞお力添えをよろしくお願いいたします。

以上でございます。ありがとうございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、東京大学理事・副学長、津田様、お願いいたします。

○東京大学 東京大学の津田です。

社会連携、産学協創を担当させていただいております。

着席して話させていただきます。

アフターコロナということであると、大体ほかの大学とほぼ同じようなことが起こっていると思います。基本的には、授業は対面が90%、会議はオンラインがデフォルト、国際的な連携も進んだことが多い、それと同時に、心の問題を抱えた学生の相談件数は激増していると伺っております。

(アフターコロナにおける)感染症という関係では、国の支援もありまして、新世代感染症センターを昨年10月に発足しました。これは、東京大学国際高等研究所の3番目の研究機構となります。

医療面では、感染症を含んだ形で、モデルナ社との協業、キヤノンとの協業、これは少し範囲が広いのですが、パスツール研究所との協働ということで、感染症を含む形でかなり広がりを見せている状況にあります。

今日お話ししたいなと思ったのは、アフターコロナというお題をいただいたのですが、まさに今、アフターコロナという状況ではありますが、アフターコロナと言っている間に、我々は物すごく大きな変化を経験している。例えば、ウクライナでの戦争行為、それに続くイスラエルとハマスの戦闘行為があって、フラグメンテーション、ジオポリティカルリスクということが叫ばれてもう1年近くになる。そういう中で、東京大学はウクライナの学生や研究者を受け入れてきたわけですが、それと同時に今度はAIというものが出てきて、本当に時代の変化が非常に激しい。例えば、1年生で入ってきて4年生で卒業するときには、少し景色の違った世界になってしまう。そのような非常に激しい変化の中で、大学とは、一体、何を教えて、どういう機能を持って、どういうミッションを持った機関であるべきなのだろうという議論が、この1年ぐらい、東京大学では続いていて、新しい大学の形を模索しているという現状でございます。

そういうことで、文京区はたくさんの大学がある地域でありますので、ぜひ、区、皆様と一緒に、大学のあるべき姿、これから求められる大学とは何なのかということ、今後、お話ししていけたらいいなと思ひまして、発言させていただきました。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、跡見学園女子大学副学長、石田様、お願いいたします。

○跡見学園女子大学 石田でございます。本日は、学長の小仲が、どうしても抜けられない会議等がありまして、副学長として代理で出させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

今、大きな話をいただいた後で恐縮なのですが、こちらはアフターコロナの中で取り組んでいることについて、雑駁ながらお話しさせていただきます。

本学でも、今お話がありました他大学と同じように、コロナを契機に、特に遠隔授業・オンライン授業等を進めてきましたが、感染防止対策ともはや関わりがないところでも、積極的に使えて、より教育効果があると思われるところでは、オンラインを使っていこうという方針です。今、カリキュラム等も組み直しているところですが、これまで以上にオンラインを積極的に活用することや、コロナ禍で意識が高まった課題解決型の授業をより積極的に導入することなどを、カリキュラム改革に盛り込もうと考えているところです。

また、オンラインでの様々な取り組みは、例えば、文京区ともいろいろとさせていただいております地域連携事業においては、全国各地の自治体との連携もございまして、ミーティングをはじめ、様々な取り組みの一部をオンラインでしています。もちろん、国際交流においても、海外における、例えば、イギリスや韓国との協定校との間で、学生同士がオンラインでZoom等を通じて定期的に交流を行うような場ができ、当初はコロナ禍の対応であったところですが、恐らく継続的にやっていくのではないかとこのところがあります。国内外問わず、離れたところにおいても、ZoomやTeams等を通じてミーティングあるいは交流会が持てるということは、今、強みとして生かしているところかと思えます。

他大学からもお話があったかと思いますが、このコロナ禍で、コミュニケーションが大変苦手である、なかなか人と話ができないような状況の学生もいる、あるいは、大学内に居場所を失っているということも出ているので、大学としても、居場所づくりに取り組んでいます。もちろんケアの面も大事ですが、卑近な例でいうと、例えば、ベンチを増やしたり、キッチンカーを呼んだりして、学内にもきちんと自分の居場所があるのだと思えるような、そしてそれがコミュニケーションの促進につながるような、学内のある種の環境整備も進めているところです。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、日本女子大学学長、篠原様、お願いいたします。

○日本女子大学 日本女子大学学長の篠原でございます。

座ってお話しさせていただきます。

今、居場所という話がございましたけれども、2021年にキャンパス統合をいたしまして、本学の卒業生である妹島和世先生の作品がたくさんできた新しいキャンパスがオープンしたそのときに、大学が閉鎖したと。コロナになって、学生が誰もいない新キャンパスということが1年半ぐらい続いたわけですが、今、やっと活気を取り戻しております。この滞在型のキャンパスというところでは、ラーニング・コモンズが、さくら（名称）、かえで

(名称)と、幾つかございまして、私どもは教養科目を全てオンラインで残しましたので、大学でオンライン授業を聴講してまた対面授業に出るという状況があります。そうした中、学生たちがラーニング・コモンズを非常にうまく使っていて、Wi-Fi環境も何とかきちんと整えられたという形で、まさに居場所としての大学ということ、今、すごく考えているところでございます。

ほかの学長先生からもお話がありましたように、コロナから守るだけでは学生を守れないということは、オンライン授業が主になっているときに、非常に痛感したところでございます。ピアサポート制度など、学生が学生を支える仕組みなどもつくってまいりましたが、それと同時に、空間も学生が居場所となり得るようなところを整えているところでございます。

もう一つ、居場所という意味では、私どもの大学は文京区の住宅地の中にあって、それなりに高齢化している地域にございますので、そういう中に6,500人の若い人たちがいることの意味とは何なのだろうということを時々考えます。文京区様とは、災害時の妊産婦・乳児救護所の提携をさせていただいておりました、図書館は、女性だけなのですが、文京区の図書館に登録している方はお使いいただけるということで、部分的には開いてございます。大して大きくないキャンパスで目白通りと不忍通りが走っておりますので、そういう意味では、本当に地域に接点が多いところなので、今後、再開発をしていく中で、地域との連携を考えたキャンパス開発、できるだけ、居住者の方、近隣の方にも立ち寄っていただけるような場所をつくっていくということを考えたいと思っています。キッチンカーを入れて、大体毎日2台ぐらい来るのですが、結構並んでしまうので、今のところは学生に限定しているのですが、近所の方からは、このキッチンカーは近所にも開いてもらえないのかという熱い御要望をいただいております。そんなところも考えながら、今後、場所だけでなく、若い学生たちと地域との接点をつくれる大学の在り方をもう少し考えていきたいと思っております。

ありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、順天堂大学学長、新井様、お願いいたします。

○順天堂大学 順天堂の学長の新井でございます。

着座で失礼いたします。

アフターコロナにおける本学の取組みについて、お話しさせていただきます。

既にお話が出ておりますけれども、新型コロナウイルス感染症の流行によりまして、遠隔授業が一気に導入されました。流行前にはなかなか進まなかったオンデマンド型授業がこのアフターコロナで定着したことは非常に大きいと思っております。現在、本学では、知識の習得はオンデマンドで行って、対面授業や実習ではディスカッションを中心としたアクティブラーニングを軸とする授業形態を理想形として変革を行っているところでございます。

オンライン授業の導入に当たり気づかれたことがありました。今の学生は、デジタルネイティブと言われておりますが、実際はスマホネイティブでありまして、デスクトップも、ノート型も、タブレットすら持っていない学生が多いということです。これがオンライン授業を行うに当たってかなり障害となり、本学では、今でこそニーズが少なくなりましたが、当初はタブレット端末を大量に購入しまして、それを学生に貸し出すといったこともやっておりました。

また、コロナが始まって以降の入試で、本学への海外からの留学希望者や国内でも遠隔地の受験生に関しては、リモートで面接試験を実施いたしました。当初はやむを得ずという色合いが強かったわけですが、コロナ禍以前より行っていた大学所在地以外に入試会場を構えるような地方入試に代わるものとしてリモート入試の活用を継続している状態です。

また、1か月から3か月の短期留学を含めると、2019年には本学では年間600名ぐらいの海外からの留学生を受け入れていましたけれども、コロナでこれが半分以下になったということでもあります。現在は、コロナ前に戻りつつございます。本学では医療系の学部が多く、留学生にとって病院での実習などは何事にも代えがたいということになります。したがって、実際に来てもらうことが重要なわけでありまして、母国に帰国した留学生が希望すれば本学でのオンライン授業やオンラインカンファレンスに参加してもらえるとといったことも可能になっておりまして、これはコロナ前にはなかった取組みと言えるように思います。海外からの大学院生が諸般の事情で学位審査前に帰国してしまうケースもございます。これについてはオンラインでの学位審査も認めておりまして、これもコロナの副産物と言えるように思います。

一方で、新型コロナウイルス感染症流行時には、学生、特に新生で、人間関係の希薄化・孤立化、これに伴う学習意欲の低下、さらにメンタル面でのいろいろな問題といったことが起きました。これは、ほかの大学も一緒だと思います。これをどのように解決し、学生間の人間関係を再構築していくかということが、私たちにとって、大変大きな課題だと認識しております。

私からは、以上でございます。どうもありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

続きまして、東洋学園大学学長、辻中様、お願いいたします。

○東洋学園大学 東洋学園大学は、ドームから一番近いところにございまして、3学部1研究科の小さな大学でございます。

着座で失礼いたします。

基本的には、ほかの大学と同じように、対面に復帰した授業をしているわけですが、ほかの大学で触れられたように、オンラインのいいところも当然ございますから、それも残しながらやっているところでございます。

先ほど話も出ましたが、今年から学園祭を対面で行って、継続していないのでみんな手探りで、地域の方にも来ていただいて、それなりに再び復活しつつあるところでござい

す。

国際交流の話もいろいろと出ているところですが、円安という問題もありまして、非常に遠いところに行くのは難しくなっています。韓国や台湾の近いところで学生を短期にたくさん留学させるようなことを、今、開発しております。居場所の問題が出ておりますが、本学でも同じでございまして、学生のビヘービアが変わってきています。それでも、たまり場ができるような形にしようということで、ラウンジを改修したり、食堂をカフェ風に改修したりいたしまして、それだけではなくて、ラーニング・コモンズ的な自習スペースやグループ学習のエリアをつくったり、電源やUSBなどを整えて、彼らがしっかりとできるようにしているところでもあります。

地域との関係では、ようやく本郷周辺の町会の皆さんといろいろな交流を復活させているところでもあります。

アフターコロナということで、いいことも少しありまして、オンラインで、公開講座、現代経営研究会という非常に高名な経営者の方に来ていただくような講座をやっているのですが、オンラインでやるとぼっと伸びまして、実際に来てくれる方も増えたということもございます。

会議は、まだ一部Teamsでやるようなときもありますが、基本的には対面に戻しております。

大きな変革、先ほどのウクライナの問題やイスラエルとハマスの問題とかが出ましたけれども、生成AIは非常に大きな問題でありまして、どう取り組むかということで、その辺に非常に精通した方にビデオクリップをつくっていただいて、学生向けにいいところも悪いところも案内しているということを始めしております。

簡単ですが、以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、日本薬科大学学長、都築様、お願いいたします。

○日本薬科大学 皆さん、こんにちは。日本薬科大学学長の都築と申します。

日本薬科大学は、2040年を見据えて、ウィズ・アフターコロナに向けて、徹底して振り切るだけ振り切って新しいことに挑戦しようという課題を持って取り組みました。2040年という年には根拠がございまして、私が18歳だった1992年、第2次ベビーブームで205万人の18歳がおりました。そして、今年の18歳人口は112万人でございます。さらに、昨年の出生者数は77万人、この子たちが18歳になるときが2040年でございます。そのために、2040年となった社会環境で、大学としてどういった価値を残すことができるだろうかと考え、教育面で徹底してオンラインというツールを使いながら、たくさんの失敗、挑戦を重ねました。大きな成功体験でいいますと、まずは、オンラインの留学の取組み、海外留学プログラムです。もともと本学は例年50人程度の学生が来日して、短期留学プログラムに参加しておりましたが、オンラインを活用したところ、1,300人を超える学生をオンラインで受け入れることができました。送り出しも、オンラインを使って60名。ア

フターコロナ時代になっても、130名を超える学生がオンラインと対面の両方を合わせて参加するようになりました。送り出しの数はビフォーコロナの時には戻っていませんが、韓国・台湾を中心に20人ぐらいの学生を送り出すようになっています。

もう一つ、成果があったのは、社会人の学び直しです。18歳が減るということは、グローバルな市場、あるいは、健康寿命の延伸を踏まえた100歳人生の市場を取っていかなくてはならないということです。ビフォーコロナの時代から、私たちは、「漢方アロマコース」という文部科学大臣認定の職業実践力育成プログラムに取り組んできました。旅行に行かれる時には楽天トラベルやじゃらん等、食事を召し上がる時、食べログやぐるなびを御覧になるかもしれませんが、社会人の学び直しにもポータルサイトがごございます。文部科学省が運営する「マナパス」というサイトで、リアルタイムでアクセスランキングも確認できます。今日現在、確認したところ、それぞれのジャンルがあるので文系（文学・語学・社会学等）のところではいいですと、日本薬科大が5位、同じ文京区内で日本女子大学が4位、3位がお茶の水女子大学、2位が放送大学、ほかの部門、看護・医学・栄養・家政部門においても、4位が日本薬科大学、2位がお茶の水女子大学、1位が放送大学を占めています。区長が常々「文京区、文の京（ふみのみやこ）は大学が最大の地場産業だ」とおっしゃっていますが、結果的に、日本最大のリカレント・リスキリングの場になっているのです。

その他の成果として、区内大学のサステナビリティ関連取組み紹介のための交流・意見交換会を昨年からは開始したことが挙げられます。昨年は11月22日に開催しましたが、これまで、区と大学の交流は学長懇談会と各大学のそれぞれの取組みにすぎなかったと感じています。今回、アフターコロナを機に、資源環境部も積極的に関与され、いろいろな形で複数の大学が取り組める場ができたのは大きなことだと考えます。大学には3つの使命がごございます。教育、研究、そして社会貢献でございまして。教育・研究活動で連携するのは、それぞれの専門もありますし、難しいところがあるのです。ところが、社会貢献や地域連携は、それぞれの大学の規模や専門、いろいろなものが違って、手を取り合って、この地域のために一緒に盛り上がって学生たちの活動を活発にできる効果があるのではないかと感じました。今後も、この文の京で皆さんと力を合わせてこの地域を盛り上げ、将来を担っていく日本の若者たちを育てていきたいと感じています。以上で、私の発表を終わらせていただきます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、東京医科歯科大学理事・副学長、内田様、お願いいたします。

○東京医科歯科大学 医科歯科の内田と申します。

今日は、学長が参議院に参考人として呼ばれておりまして、代理で出席させていただきます。

着座で失礼いたします。

私自身は今年から理事をしておりますけれども、コロナ禍の3年間はずっと病院長をし

ておりまして、文京区の皆様とも力を合わせて、何とかコロナを乗り切ったところであり
ます。実際、東京ドームで集団ワクチン接種も一緒にさせていただきました、本当にあり
がとうございました。

最近、私事でいえば、御茶ノ水駅から見て正面に、立方体の新しい病棟が立ち上がりま
した。いわゆるA、B、CのC棟、クリティカル病棟という形でできまして、重症のICU、
救急、手術室といったものが新しくなりました。今後も、パンデミック対応のみならず、
災害対応も力を入れていきたいと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

本日は、アフターコロナに対する取組みということでございました。現状、今、我々の
大学は東工大との統合の話でてんやわんやしているところがございますけれども、そうい
ったところから少し離れて、今日は、1枚物で書いてありますけれども、毛色の違う話で、
スポーツを通じた健康増進についてということで、簡単にお話しさせていただきたいと思
います。今、医療費がどんどん増えているという状況でございますけれども、病気になる
前に病気にならないようにするというところで、医療費の増大に対して抑制をかけていくと
いうのは一つの考え方かと思っております。本学におきましては、2014年からスポーツサイエン
ス機構というものがありまして、そこで、スポーツ医歯学に基づいてアスリートのトータ
ルヘルスケアに取り組む、その成果を国民に還元していくということを目指しております。
スポーツ庁に、今、室伏長官がおられますけれども、本学の特任教授でいらっしゃいまし
た。長官とさすがにクロアポはできませんので、今は長官オンリーでございますけれども、
長官の任期の後はまた戻ってきていただけるということをお伺いしております。室伏長官
は、Sport in Lifeプロジェクトといいまして、東京オリンピック・パラリンピックでトッ
プアスリートのコンディショニングを支えた知見を生かして、各地域においてスポーツを
通じた障害が起きてしまうことを予防しようとか、一般の方々のライフパフォーマンスの
向上に資するプロジェクトをされております。実際、北海道の東川町というところで、腰
痛予防プログラムということで成果を上げていらっしゃると聞いております。一方、文京
区様におかれましても「いきいきシニアの元気力マップ」という情報誌を作成しておられ
るようで、高齢者の健康づくり・生きがいくりのためのプログラムを多数用意されてい
るとお聞きしておりますけれども、こういったスポーツ庁の知見も生かした上で、スポー
ツを通じた地域住民との健康増進に本学が医療面でサポートをさせていただくという形で
何かできないかということを考えているということでございます。具体化はまだござい
ますけれども、先日、室伏長官にも御参加いただいて、我々、文京区、スポーツ庁の間で
ミーティングをさせていただいたところがございます。

以上でございます。微力ではございますけれども、これからも文京区と力を合わせてい
わゆる地域の課題・健康面に貢献できればと思っております。よろしく願いいたします。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、文京学院大学学長、福井様、お願いいたします。

○文京学院大学 4月より学長を拝命しました、福井と申します。どうぞよろしく願い

いたします。

本学は来年度創立100周年を迎えるということも、併せて伝えさせていただきます。

座らせていただきます。

うちに、来年度、福祉医療マネジメント研究科という福祉医療のマネジメントを中心としたしました専門職大学院を開設する運びとなっております。

アフターコロナは、他大学様からほとんどのことを言い尽くされてしまったと思いますので、少しだけ違う点で申しますと、まず、私どもは会議体の見直しを少しやりまして、オンラインでやりますと、この参加者の人は話を聞いているのかなと思うことがどうしてもよくありまして、会議の頻度、メンバー、実際の時間といったことの見直しを始めたところ です。

学生に関しましては、AIチャットボットのようなものの導入、やっとな私どもも経理課のペーパーレスといったものが同時に進んだということがございます。

危機管理に関しては、コロナだけではなく、先ほど来、皆様もおっしゃっていますような心のケアの問題並びに親御さんからのこと、最近の景気の問題等々がありまして、学費や留学するときの円安の問題なども出ているかと思っております。

少しいいことといえば、内部質保証に関係するような大学内でのデジタル化も幾分か進んだかと思っております。

私どものような大学ではどうしても横との連携をつくっていかなければいけないものですから、先ほど来、区長が言われましたような体育館や図書館の協力もぜひ進めていきたいと考えております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、日本医科大学学長、弦間様、お願いいたします。

○日本医科大学 日本医科大学の弦間でございます。

座らせていただきます。

私どもは医学部を中心としておりますので、コロナパンデミックに際しては、文京区の皆様とかなり御協力をさせていただきながらここまで来たと思っております。

まず、オンライン教育については、皆様が既にほとんどお話しになっている内容でございますけれども、私どもは、コロナとは全く別に、5年前から全講義をオンラインで流していた状況がございますので、いろいろな経験をさせていただいていました。利点、一方で、問題点について、少し早めに経験しているかもしれません。

特に学生の格差が広がっているように思っています。これにつきましては、成績上位者については、我々の講義の時間が足かせになっていた部分があったということが分かりました。現在、自由度が高まり伸びてはいるのですが、一方で、そういう人たちとは逆に、ついてこれないという人たちも出てきていて、この人たちに対しては対面にせざるを得ない状況があります。成績が生活と密接に関係しているといえますか、朝も起きな

いという状況が生まれてきてしまうので、そういったところへのセーフティーネットをしっかりと整えなくてはいけないということを考えています。

国際交流につきましては、この間失ったものはかなり大きくて、今、ある意味ではリバウンドのような状態で、インバウンドは増えてはいますが、アウトバウンドについては、留学という長期のものに関して、円安の要因もありますけれども、希望者が減っているという状況があります。今年はいろいろな世界の大学を回ってみようと思っっているのですが、大学院生等の希望に沿ったようなものを細かく検討していかなければいけないと思っています。

体験活動や課外活動についても失ったものが大きいと思っております。特にコミュニケーションの方法や礼儀といった伝統が喪失していると感じています。これについては、まずは自由にして、それでも何か必要なものに対応していこうと思っています。

いろいろな課題が生まれてきていますので、皆様にもいろいろとお知恵をお借りしたいと思っておりますし、文京区の方々にも御相談したいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 皆様、様々な取組みについてお話しいただきまして、ありがとうございました。

続きまして、次第のその他、「区からの情報提供」に入ります。

説明用の資料ですが、次第の入っていましたフォルダの最後に、A4、カラーの1枚物が入っております。こちらの準備をお願いいたします。

それでは、企画政策部長、お願いいたします。

○企画政策部長 企画政策部長の大川でございます。

着座にて、失礼いたします。

この場をお借りしまして、学長様方に、次年度からの本区のふるさと納税を活用した取組みにつきまして御紹介させていただければと思います。

席上にお配りしています、A4、「ふるさと納税を活用した取組みの拡充について」という資料を御覧いただきながらお聞きいただければと思います。

既に御存じのことかもしれませんが、ふるさと納税を行う方が年々増えておきまして、都内自治体におきましては、区民税の減収が大きな問題となっております。本区におきましても、先ほど区長からありましたように、本年は約35億円の減収を見込んでいるということでございまして、看過できない状況となっているところでございます。一方で、ふるさと納税制度は、地域の団体と連携し、地域の魅力を発信し、地域振興を図る機会にもなると捉えております。本区としましても、先月より返礼品の取扱いを拡充いたしまして、来年度はさらに各大学様と連携した取組みを拡充させていただければと思っっているところでございます。本日は、本区で検討しております2つの取組みを御紹介させていただきます。

まず、資料の左側、①ふるさと納税を活用した大学寄附でございます。ふるさと納税で集まった寄附金を財源に、各大学様の地域連携授業の支援をと考えております。資料の左下にスキームイメージを図示してございますので、併せて御覧ください。大学様が実施する地域連携事業に対し、区がふるさと納税による寄附を募り、寄附者の方が選択した大学へその寄附額の7割を区から交付するという事で、各大学が実施する地域連携授業の促進を図るものでございます。

次に、右側、②ふるさと納税返礼品の拡充でございます。本年から、本区においても返礼品の拡充を図ったところです。本年は、東京大学様に御協力いただき、東京大学公開講座利用券を返礼品として提供させていただいております。来年度はさらなる返礼品の拡充を検討しておりまして、各大学様の特色や魅力の詰まった返礼品について、今後、相談させていただければと思っております。

本日は紹介のみになりますけれども、紹介につきましては、後日、改めて各大学の事務局へ御案内させていただきますので、御検討いただけますと幸いです。恐らく年明けの1月から2月辺りにこちらの企画から御連絡させていただくことになろうかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

説明は、以上になります。

○アカデミー推進部長 以上で、次第の項目につきましては、全て終了いたしました。

それでは、これより、若干の休憩を挟みまして、12時15分より、懇談を兼ねての御会食に移りたいと存じます。会食は、本会場の隣、「初音」にて御用意しております。

なお、お手元の配付資料につきましては、会食後、受付にてお渡しさせていただきますので、差し支えなければ、お席に置いたままで御移動ください。